

記載日付: 2010年1月30日

ライター: 鈴木富司

番号: 000-082

タイトル: 中国自動車産業発展の物語

中国が世界一の自動車消費国になるのは、漠然と分かっていたことでした。しかし、実際にそうなったと報じられると、あのやりとりは何だったのだと今から25～26年前の滑稽な会議の様子が思いだされます。

中国から、30件もの自動車製造に関する技術提携の呼びかけを受けて、中国に何度も出張をして調査をしたり、話し合いを持った物語は、21話や54話で書きましたが、福建省福州市のプロジェクトは、その中でも一番具体的な話でした。確か、福州市汽車公司という名前のこぢんまりした自動車会社との交渉でした。

今から考えると、交渉というよりは、中国側は会議を通じて日本の技術を習得したかったのだと思います。日本側からは改造するとしたら、こんなレイアウトになるでしょうね、ということで図面は出すは、技術者もこちらの費用で出張して何日も不毛な議論に時間を費やしたのです。

ある時、中国側が突然自動車生産に必要な鉄鋼の重さを知りたいと言い出したのです。日本側の技術者は、「今は、技術提携をするとしたら工場をどう改造してどんな車種を何台つくるかの議論をしている時だ、つまり、「そんな話は後でしょう」ということで、相手にはしません。しかし、相手は泣きそうな位真剣に訴えるのです。しかし、何故そう質問をしているかは言いません。言えない理由があるように感じましたので、後日の相談ということにして、会議が終了したあとに非公式に調査をすることにしました。

理由が分かりました。「国家計画経済」により、鉄鋼を何トン使うかを上部機関を通じて国家に報告をしなければいけないのだそうです。それも、国家機密であるから、報告することを外国人に漏らしたらえらいことになると怖れたのだと想像されました。三菱自工の技術者に「数字を出してやってよ」と頼んでも、「何を言うんですか」、「自動車に使う鉄鋼と言っても、ボデーの鉄鋼ですか、ここでエンジンまで造るという前提なのですか」、「ボデーの鉄板だけでも20種類もあるんですよ」、「何を何台つくるかも決まっていらないのに、そんなアホな数字を纏める馬鹿な仕事はできません」と取り合ってくれません。自動車を生産する国家の計画に、鉄鋼の種類も明示しないで、ただ何トンと書類に書かせるという国家計画経済の実態を知り驚いた記憶があります。

もっと、深刻な中国側の苦悩を垣間見ることもありました。工場のレイアウトを論じている時、不思議なことが起こりました。三菱自工が提示したレイアウトを中国側が気に入らないと言うのです。その頃の三菱自工の生産技術は、世界一という自負心もありましたし、中国側から文句を言われる筋はないと「理由を言ってくれ」と長いこと押し問答が続きました。全く議論がかみ合わないのです。何かあるなと感じて、その場は何とか収めて、また別ルートで事情を探ったのです。公式の会議では言えない事情が分かりました。

国家が指導する工場を造る時のマニュアルがあり、「工場内の道路は直線でなければならない」と規定していて、そのマニュアルに従わねばならないと言う事情があることが判明しました。中国側の技術者も三菱の技術者が説明するレイアウトの方が合理的であり、既存の建物を活かすには、そうせざるを得ないのは充分理解するが国家の規定には逆らえないし、国家の規定を批判するようなことは言えないから、延々と議論が何時間も続いたのです。法律による遵守せねばならない規定なのか、単なるガイドラインとしての規定なのかははっきりしない規定だったので担当ベースでは、どうにもならなかったのです。結論は忘れましたが、上層部に働きかけて解決したと思います。

中国側の視察団が、日本にやってきた時のことも思い出されます。品川のホテルで彼らを部屋に送り届けてから、レストランで一杯やっていたら、副工場長がロビーにでてきて、片隅のテーブルで、一生懸命レポートを書いていた。真剣そのものでした。二人部屋が窮屈なので分かれて仕事をしていたのだと思います。声を掛けては邪魔になると思って、1960年代に、われわれ日本人が寝食を忘れてレポートを書いていたことを思い出しながら、見守ったのを昨日のこのように思い出します。

それから、更に時代を経て、福州市の汽車会社の幹部は、現在どうなっているのでしょうか。ネットで検索したら、2006年の記事で、「三菱自動車は、東南汽車(福建)工業有限公司に対する25%の出資手続きが完了したことを発表した。」と出ていました。もう、私の思い出は、全く遠い昔の歴史物語になっていますね。